

## 組織ディスコース研究部会について

組織ディスコース研究部会 主査 (明治大学) 高橋正泰 (たかはし まさやす)  
幹事 (長崎県立大学) 四本雅人 (よつもと まさと)  
(西南学院大学) 清宮 徹 (きよみや とおる)  
(光産業創成大学院大学) 増田 靖 (ますだ やすし)

### 1. はじめに

近年、ヨーロッパを中心に「ディスコース」への関心が社会科学において高まりつつある。ディスコース分析においては、実体概念から関係概念へと捉え直すことによって、人々がどのように意味世界を構成するのか、そして、社会的行為がどのように生成されるのかを明らかにすることが可能になる。組織ディスコース研究部会では、こうした方法論・分析手法をもって、昨今の多様化する組織現象、および情報の調査分析を進展させることで経営学のさらなる発展に資したいと考え、言語派組織情報研究部会を前身とし、2011年に発足した。

### 2. 研究部会の活動内容 (高橋正泰・四本雅人)

研究部会の具体的な活動としては、年5~6回の研究会(研究発表会)の開催と、経営情報学会全国発表大会での研究部会セッションや個別のワークショップ、シンポジウムの開催を行っている。2017年度は国際ワークショップ“The Power of Diversity”をホノルルで開催した。また、海外から組織ディスコースやCMS(Critical Management Studies: 批判的経営研究)の著名な研究者(以下、敬称略);組織ディスコース研究の第一人者 David Grant(グリフィス大学), CMSの Hugh Willmott(カーディフ大学), Rick Delbridge(カーディフ大学), Mats Alvesson(ルンド大学), 新制度派組織論の Roy Suddaby(ヴィクトリア大学), AOM(Academy of Management)元会長の Paul Adler(南カリフォルニア大学)他をこれまでに招聘し、ワークショップを行ってきた。

海外での研究発表としては、本研究部会のメンバーにて、2011年のAOM(サンアントニオ)で“CMS Meets The East: Studying Management Crit-

ically in Japan”のシンポジウム、2014年のAOM(フィラデルフィア)では“Language, Discourse and Organizational Change in Japanese Contexts”のシンポジウムセッションを設けた。また、ヨーロッパの学会であるSCOS(Standing Conference on Organizational Symbolism)やEGOS(European Group for Organizational Studies)において、本研究部会のメンバーが毎年、研究発表を行っている。

その他には、本研究部会のメンバーにより、David Grantら(2004)の編集による*The SAGE Handbook of Organizational Discourse*を翻訳し、『ハンドブック 組織ディスコース研究』として、2012年に同文館出版より出版した。全20章(本編17章+補論3章)、総700ページを超える翻訳書となった。

以上が、組織ディスコース研究部会のこれまでの活動内容の概略である。

この後は、本研究部会の名称になっている組織ディスコース研究について、また、ディスコース研究のコアの1つである物語論について、それぞれ紹介していく。

### 3. 組織ディスコース研究について (清宮 徹)

日本において、組織ディスコースの研究(ODS: Organizational Discourse Studies)は、まだ始まったばかりで歴史も浅く、研究者の数も限られている。これに対し海外では、1990年代後半から主要な研究アプローチとなっている。ヨーロッパやオセアニアの組織論研究者の一部と、アメリカの組織コミュニケーション研究者は、組織におけるディスコースを視座の中心に置き、従来の定性的アプローチとは異なる質的研究を形成した。この流れは、組織文化の研究が、ストーリーや語りに重点を移したことによる。それに加え、社会科学における「言語論的転回(linguistic turn)」が起き、組織研究のパ

ラタイムにおける大きな変革が起きたことと関連する。それは言語学に依拠するのではなく（言葉そのものの研究ではなく）、社会的コンテキストとの関係で組織のテキストを反省的に理解しようとするのだ。ディスコースとは「社会的な対象を現実に至らず記述のまとまり」であり、「相互に関係するテキストのまとまり」とみなされている（Parker, 1992）。ここでのテキストとは、発話された言語に限らず、Eメールやブログなどオンライン上の社会的実践、また、企業が発する広報紙や社内報、ホームページ、歴史的文書などが含まれる。インタビュー、スピーチ、ナラティブ、会話などもディスコースを分析する際の重要なデータである（清宮, 2011）。したがって、ODSで行うディスコース分析は、社会言語学の談話分析と重なるところもあるが、より幅広い多様なデータを取り扱うことになる。

このように、ODSのディスコース分析は、視座（perspective）であると同時に方法（methods）である（Phillips and Hardy, 2002）。ディスコースの視座では、言語を「世界を映しだし叙述する受動的な媒介と見るのではなく、世界が私たちにとって意味あるものとする積極的なもの」と捉える（Gabriel, 2008）。そして、ディスコースの方法論では、言説とその相互作用が社会的な現実を作り、関係性はコミュニケーションを通して生成・変革されると考える。つまり、組織という関係性は、ディスコースによって再生産され、この過程を分析することによって、組織の諸問題を理解することが可能になる。そこで、組織ディスコースを次のように定義する：「組織は、そのメンバーがディスコースを通じてそれ自体を創造する限りにおいてのみ存在する。これは、組織とはただディスコースにすぎないと言っているのではなく、むしろ、ディスコースは、組織メンバーが自分たちは何者であるかという意味を形成している明確な社会的現実を作り出す主要な手段であることを主張している」（Mumby and Clair, 1997: 181）。組織に関わる複雑な社会的現実を構成する多様なディスコースについて、それらのテキストとコンテキストの関係を考察することで、言語化された概念を問題化するのである。日常の多声的ディスコースとその相互言説性に着目し、中心化する言語化の実践、そして、辺境化する実践の関係を問題化する。なぜ、どのようにして、特定のことが言語化

され、またそうでないこと（例えば、組織における沈黙化）があるのか。クリスタル化して社会的注目の中心になる組織ディスコースと、それによって盲目化する関係を浮かび上がらせる。

研究領域としては、上司と部下などの組織内の人間関係や、リーダーシップ、組織開発や組織変革、組織アイデンティティ、交渉、労使関係、コーポレート・コミュニケーションなどが一般的である。また、ODSは多様な組織の問題に対して、批判的な考察も行う。職場のジェンダー問題、組織の権力、イデオロギー、不正や不祥事、経営主義への批判、グローバリゼーションなど、資本主義組織へ警鐘を鳴らし、より良い組織への変革に向けて研究を実践する。

#### 4. 物語論の系譜（増田 靖）

続いて、近年、注目される「ナラティブ」という概念の起源である「物語論（ナラトロジー）」の系譜を辿ることで、その理論的背景を顕現させ、今後の経営情報分野における組織ディスコース研究の発展に資することを試みる。

「ナラティブ」あるいは「ストーリー」「ストーリーテリング」など日本語では「物語」や「語り」という概念を研究、実務を問わず経営分野で見聞する機会が増えている。「ナラティブ・アプローチ」という、これも研究と実務において用いられている方法が経営分野の研究に登場するのは、1980年代からといわれている。しかし、他の分野、例えば、医療や看護、心理療法、心理学、社会学などでは、それ以前からこの概念と手法はその実効性ととも研究と実務において導入されている。

物語論の系譜を辿ると、その起源は西洋文明の起源の一つである古代ギリシアまで遡ることができる。万学の祖といわれるアリストテレスの『詩学』（Kassel, 1965）が嚆矢とされる。『詩学』の中で現在でも文学分野に限らず、上記の様々な分野で多用される重要な概念が議論されている。

「ミュートス（筋、出来事の組立て）」「ミメーシス（創造的模倣）」「物語は行為する人間の再現」「逆転、認知、変転」「物語は初め、中間、終わりを持つ」「創作の二つの原因（再現は人間の自然な傾向と人間は再現されたものを喜ぶ傾向）」「悲劇はあわれみ

とおそれを通じて、感情のカタルシス（浄化）を達成する」「歴史は過去のこと、個別的なことを語り、創作は未来のことを語ることができ、より哲学的で、普遍的なことを語る」などである（『詩学』の中では「悲劇」が対象であり、創作行為も「詩作」であるが、本稿では「物語」と「創作」と訳した）。

アリストテレスの後、ローマ時代のホラーティウスの『詩論』（Wickham, 1963 (1901)）など、その系譜は続くが、ルネッサンスによって文芸復興が起こるまで、ヨーロッパで「物語」が生産されることは殆どなかった。中世の世界では「物語」は神のみに属すもので、まさに「His Story (History)」なのであった。そのため、ヨーロッパで「物語」が文学として成熟するのに時間を要した。ボッカチオが『デカメロン』（1348-53年）を著したのは14世紀に入ってからである。「物語論」も大きな展開は見られなかった。他の思想、学問、科学同様に、物語論も近代の夜明けを待たねばならなかった。

近代物語論の嚆矢は、Propp (1969 (1928)) の『昔話の形態学』とされる。彼は民話の研究を自然科学の有機体の研究と比較し、文学分野における科学的アプローチの可能性を追求した。また、彼は100の不思議な民話を調査し、そこから民話には31の機能があることを発見した。同時代にTomashevsky (1965 (1925)) は「テーマの研究」の中で「テーマ」「モチーフ」「物語（ファープラ）」「主題（シュジェート）」という文学研究における4つの重要な概念を提示している。また、Sklovskij (1925) は『散文の理論』を著す。

彼らがロシア人であったことから、この研究潮流は「ロシア・フォルマリズム」と呼ばれる。この呼び名は、例えば、現在「ポリフォニー論」や「カーニバル論」など「対話理論」の諸概念でたびたび引用されるBakhtin (1963, 1965) ら他の研究者から、作品の形式ばかりに拘る彼らの研究方法を揶揄して付けられたものである。

しかし、「ロシア・フォルマリズム」の一連の研究が現代的意義を持たないということはない。構造主義を代表するレヴィ＝ストロースは、亡命中にアメリカで言語学者のヤコブソンから、ソシュールの言語学とともにPropp (1969 (1928)) の研究も紹介され、彼の研究において大きな影響を受けたことはよく知られている。また、今日でも研究（例

えば、森下・増田, 2018）や実務（例えば、山川, 2007）、創作活動（例えば、大江, 1988）において活用されている。

ロシア・フォルマリズムがフランスに紹介される（Todorov, 1965）と、物語論は大きく展開する。Greimas (1970) は、Propp (1969 (1928)) の理論を精緻化し、記号論として確立した。彼は読者が文字通りに知る物語の「表層構造」と意味作用により理解される「深層構造」を明らかにし、意味論レベルでの分析を試みた。また、哲学者のBarthes (1961-71) は、Propp (1969 (1928)) の機能分析とGreimas (1970) の行為項分析を併用することにより、新しい構造分析（テキスト分析）を構築した。

一方、Genette (1972, 1983) は、Tomashevsky (1965 (1925)) の「物語（ファープラ）」「主題（シュジェート）」の概念を深化させ、大きく発展させた。まず、物語事象を的確に把握するために、これらの術語を「物語内容（histoire）」と「物語言説（recit）」とし、さらにそれらを繋ぐ言語行為としての「語り（narration）」概念を提唱した。これは、広義では「語り手」と「聞き手」を含んだ言語行為のことである。「語り」という言語行為を分析対象とすることで、その後、言語学研究、あるいは言説分析は大きく展開することになった。

さらに、哲学者のRicoeur (1983, 1984, 1985) は『時間と物語』の中で、アリストテレスの『詩学』の諸概念を用いて、時間性のアポリアの解決を試みた。その哲学的思考の結果、「ミメーシス（創造的模倣）」概念を「ミメーシスI（先形象化）（模倣に関する先行理解）」「ミメーシスII（統合形象化）（筋立て）」「ミメーシスIII（再形象化）（読者による作品受容）」と精緻化し、さらに「物語られる時間」という概念を提示し、絶えず繰り返されるミメーシスの循環（解釈学的循環）における一連の再形象化によって生じる「物語的アイデンティティ」という概念を導出した。

簡単に系譜を辿るだけで、現在、現場研究の手法として用いられる「ナラティブ・アプローチ」の背景に多くの理論が控えていることがわかるが、紙幅の関係で極僅かしか紹介できなかった。「ロシア・フォルマリズム」と同時代であったが、フランスに紹介されたのがかなり遅かったBakhtin (1963, 1965) など、今日の組織ディスコース研究に欠か

せない理論もまだまだ存在する。また、「もう一つの物語論」と呼ぶうる「日本の物語論」についても機会があれば紹介したい。

## 5. おわりに

以上、組織ディスコース研究部会の活動内容、そして、組織ディスコース研究と物語論について、紹介してきた。本研究部会では、不定期で研究会（研究発表会）を開催しているので、関心をお持ちになった方は、研究会にご参加頂けると幸いです。

## 参考文献

- 大江健三郎『新しい文学のために』岩波書店、1988年。  
清宮徹「組織コミュニケーションの質的研究：組織ディスコース」、日本コミュニケーション学会編『現代日本のコミュニケーション研究』三修社、2011年、90-102ページ。
- 森下桂嗣・増田靖「実践に潜在する物語と戦略が創発する『語り』—新規事業開発における市場調査の現場事例研究—」『経営戦略研究』第18号、2018年、3-29ページ。
- 山川悟『事例でわかる物語マーケティング』日本能率協会マネジメントセンター、2007年。
- Bakhtin, M., *Проблемы поэтики Достоевского*, Москва: Художественная Литература, 1963. (望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房、1995年)
- Bakhtin, M., *Творчество Франсуа Рабле и народная культура средневековья и ренессанса*, Москва: Художественная Литература, 1965. (川端香男里訳『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』せりか書房、1995年)
- Barthes, R., *Introduction à l'analyse Structurale*, Editions Seuil, Paris, 1961-1971. (花輪光訳『物語の構造分析』みすず書房、1979年)
- Gabriel, Y., *Organizing Words: A Critical Thesaurus for Social and Organization Studies*, Oxford: Oxford University Press, 2008.
- Genette, G., *Discours du Recit in Figures III*, Seuil a Paris, 1972. (花輪光・和泉涼一訳『物語のディスコース』水声社、1985年)
- Genette, G., *Nouveau Discours du Recit*, Seuil a Paris, 1983. (和泉涼一・青柳悦子訳『物語の詩学』水

- 声社、1985年)
- Grant, D., Hardy, C., Oswick, C., and Putnam, L., *The SAGE Handbook of Organizational Discourse*, Sage, 2004. (高橋正泰・清宮徹監訳『ハンドブック組織ディスコース研究』同文館出版、2012年)
- Greimas, A. J., *Du sens*, Seuil, 1970 (赤羽研三訳『意味について』、水声社、1992年)
- Kassel, R., *Aristotelis De Arte Poetica Liber*, Oxford, 1965. (松本二助・岡道男訳『アリストテレス詩学・ホラーティウス詩論』岩波書店、2012年)
- Mumby, D. K., and Clair, R., "Organizational Discourse," in Van Dijk, T. A. (ed.), *Discourse as Structure and Process: Discourse Studies Vol. 2-multidisciplinary Introduction*, London: Sage, 1997, pp. 181-205.
- Parker, I., *Discourse Dynamics*, London: Routledge, 1992.
- Phillips, N., and Hardy, C., *Understanding discourse analysis*, Thousand Oaks, CA: Sage, 2002.
- Propp, V., *Morphology of the Folktale*, University of Texas Press, 1969 (1928). (北岡誠司・福田美智代訳『昔話の形態学』水声社、1987年)
- Ricoeur, P., *Temps et recit, Tome I*, Editions du Seuil, 1983. (久米博訳『時間と物語I』新曜社、1987年)
- Ricoeur, P., *Temps et recit, Tome II*, Editions du Seuil, 1984. (久米博訳『時間と物語II』新曜社、1988年)
- Ricoeur, P., *Temps et recit, Tome III*, Editions du Seuil, 1985. (久米博訳『時間と物語III』新曜社、1990年)
- Sklovskij, V., *О теории прозы*, Москва: Советский писатель, 1925. (水野忠夫訳『散文の理論』せりか書房、1971年)
- Todorov, T. (ed.) *Theorie de la Litterature*, Seuil, 1965. (野村英夫訳『文学の理論—ロシア・フォルマリズム論集—』理想社、1971年)
- Tomashevsky, B., "Teorija Literatry," in Todorov, T. (ed.), *Theorie de la Litterature*, Seuil, 1965 (1925). (野村英夫訳「テーマの研究」『文学の理論—ロシア・フォルマリズム論集—』理想社、1971年)
- Wickham, E. C., *Horati Flacci Opera*, edition altera, cur. H. W. Garrod, Oxford, 1963 (1901). (松本二助・岡道男訳『アリストテレス詩学・ホラーティウス詩論』岩波書店、2012年)

## 研究部会連絡先

連絡先：幹事・四本雅人（長崎県立大学）  
E-mail: imi.discourse@gmail.com